

桑田 真澄さんが来館されました

事務局長 佐藤 宏

去る3月17日(木)、桑田 真澄さんが来館されました。これは(社)全国野球振興会(日本プロ野球OBクラブ)の主催による「夢・未来応援プロジェクト プルペン」の講師として招かれたものです。

当日は将来プロ野球選手を目指す、埼玉県草加市の中学生が受講しました。

このイベントは、プロ野球選手OBとのふれあいを通じて「プロ野球選手」および「プロ野球」に携わる職業について、児童・生徒に理解を深めてもらうとともに、「夢に向かって頑張る」ことの大切さを伝え、将来の職業について考えるうえでのきっかけ作りを支援するとともに、心身の健全な発達に寄与することを目的としたものです。こうした試みは過去にも行われており、江藤省三さん、城之内 邦雄さん、阿波野 秀幸さん、初芝清さんらが少年達を相手に講義されています。当館は殿堂ホールもしくは応接室の施設提供、受講後の館内見学というかたちでイベントに協力しています。



冒頭、桑田さんは「将来のことを考えると、君達自身が宝物だという自覚を持ってほしい。人生には楽しみもあれば、過酷な部分もある。野球というスポーツもまさに人生を凝縮したようなもので、楽しみもあれば残酷な面もある。どんな名打者でもせいぜい打率は3割、つまり7割は失敗しているということになる。ただ、失敗を恐れてばかりいれば、3割の打率を残すこともできない。君達には失敗を恐れない勇気を持ってもらいたい。」その後、活発な質疑応答が行われました。そのなかで桑田さんが強調されたのは、「挑戦すること、考えることが大切。ただ長時間野球の練習をするのではなく、効率的

に考えて練習する。時間を有効に使って、学校の勉強も、遊ぶことも、中学生にとっては重要。」ということでした。PL学園、巨人軍、パイレーツ、早大大学院卒という野球エリートのキャリア・パスを経験した人ならではの言葉だと感じました。

講義を受けた中学生達はサインボールなどのお土産を貰い、意気揚々と引き揚げていきました。忘れられない1日になったことでしょう。

桑田さんは今後も野球に関する研究を続けられるようで、図書室で野球関連の雑誌を熟読してから、お帰りになりました。またのご来館をお待ちしています。



コラム／博覧・博楽 (34)



真の大リーグ通と呼ばれた歯科医の話 (3)

—海を渡ったスコアブック—

今里 聡 (今里 純氏 長男)



写真1：アメリカ野球殿堂博物館正面

2009年12月、私は、ニューヨークから車で4時間程北上した雪深いクーパースタウンに降り立った。野球の聖地と言われるアメリカ野球殿堂博物館を訪れるためである。私の父、今里 純は、兵庫県西脇市の開業歯科医でありながら、日本有数の大リーグ研究者として日米プロ野球の交流に身を置いた人物であった (ニュースレターVol. 18/No. 2, 3に詳細を書かせていただいた)。父が大リーグのコミッショナー事務局から全米の球場のフリーパスを贈られるような特異な日本人となるきっかけとなったのが、進駐軍用に放送されていた英語での大リーグの試合のラジオ実況中継を聴いてそのスコアを記録する

という趣味であった。この極めてマニアックな趣味を、父は1946年頃から始めたが、ほとんどの日本人がまだ大リーグに興味を持っていなかった当時、非常に珍しい熱狂的ファンとして、やがてその名がアメリカのメディアに知られ、大リーグ各球団の広報係やコミッショナー事務局に知られるようになり、ひいては日米プロ球界の橋渡し役を依頼されるようになっていった。父が記したスコアブックは200冊を超えるが、その一部がクーパースタウンの野球殿堂博物館に展示されたことがあるという記録が残っている。1年ほど前から、西脇市の有志の方々が父の生前の業績を整理する作業を始めて下さっていることから、寄贈されたスコアブックがまだ存在するかどうかを是非とも確かめたいという想いに駆られるようになり、この度クーパースタウンへと足を運んだ。

クリスマス直前のため博物館を訪れる人も比較的少なく、街は静かであった (写真1) が、資料部門のSenior DirectorであるErik Strohl氏と図書部門長であるJim Gates氏が温かく迎えてくれた (写真2)。まず、3階建の館内に見事に散りばめられている充実した展示品の案内を受けた後、厳重にロックされた保管室へと招かれた。それは、往年の名選手のバットやグラブ、帽子等を保管する通常は入室できない広大な保管庫であり、その室内でいくつかの品を直接手に取らせてもらうという貴重な体験をした。ベーブ・ルースのユニフォームやルー・ゲーリックのバット等、歴史の重みを感じる品々に触れて心踊らさずには居られない瞬間であった (写真3)。次に導かれた資料整理室では、文盲だった“シューレス”



写真2：Erik Strohl氏 (右)、Jim Gates氏 (左) と筆者 (中央)



写真3：ベーブ・ルースのユニフォーム



ジョー・ジャクソンのサインが記された契約書等、大リーグ史上重要な所蔵書類とその厳密な保管方法の話に興味深く耳を傾けた。そして、プライベート館内ツアーの最後に「さあ、どうぞ」と案内された部屋に入った途端、私は思わず息を呑んだ。机の上に、父の寄贈したスコアブック、新聞記事、選手とのスナップ写真などが整然と並べられており、これが“Dr. Jun Imazato collection”だと紹介されたのである。1961年に日本で放送された大リーグの全試合を記録した8冊のスコアブックは、48年の時を超えてなお変わらぬ状態で保存されていた(写真4)。そして、「寄贈者の御息息が長い年月を経てこうして訪ねて来てくれることはとてもうれしいことですよ」というGates氏の言葉に私は胸を打たれた。



写真4：かつて展示されたという父のスコアブック

父は、博物館への寄贈に先立って、やはり日本で放送された1年分の試合のスコアブックを「野球のバイブル」とも呼ばれる有名米スポーツ誌「The Sporting News」に送っており、それに驚嘆した社主のTaylor Spink氏から各方面に父の話が広まっていったようである。また、1958年のセントルイス・カーディナルスの来日時には、ラジオの実況を担当するアナウンサーに球場でインタビューを受け、後日アメリカで放送された特別番組においても父のことが詳しく紹介されたとのことである。海を渡ったスコアブックは、日米プロ野球の交流開拓の歴史に確実に刻まれた一歩であることを目の当たりにし、感無量の中で、野球というスポーツの発展とそれを通したさらなる日米の友好を願いつつ、私は父との再会の旅を終えた。(今回の博物館訪問に際しては、日本野球体育博物館の鈴木 龍一、新 美和子の両氏にいろいろとお骨折りをいただいた。衷心より感謝申し上げます。)

● 維持会員を募集しています！ ●

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

❑1. 会員特典

- (1)当博物館発行「ニュースレター」(季刊)送付します。
 - (2)無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
 - (3)アメリカの野球博物館(クーパースタウンにある)にも無料で入館できます。
 - (4)会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
 - (5)イベント情報などを優先的にご案内します。
 - (6)博物館で販売している商品が10%引きになります。
- *新個人会員には上記の特典のほか、『野球殿堂1959-2009』を進呈します。(ジュニア会員を除く)
*新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッチ」を差し上げます。



❑2. 会員の種類と会費

年会費(4月～翌年3月迄)	
法人会員	1口 10万円
個人会員	1口 1万円
ジュニア会員(小・中学生)	2,000円

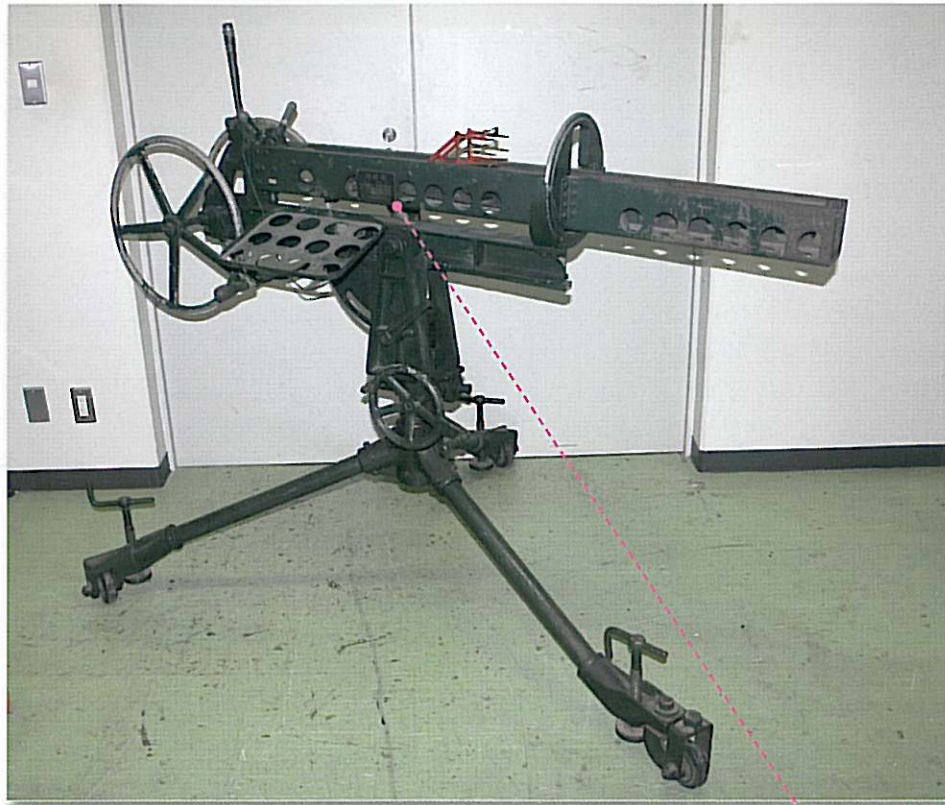
❑3. ご入会の方法

- ①館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”または当館ホームページ上(<http://www.baseball-museum.or.jp/museum/member/membership.html>)の入会申込書に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。
 - ②“入会申込書”が届きしだい“維持会費のご請求書”をお送りしますので、維持会費をお振込みください。
- お問い合わせ 博物館 業務部
皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。



知ってほしいこんな資料(70)

初の日本製投球機



日本で独自に研究開発された投球機(ピッチングマシン)をご紹介します。

1956年に関東学院大学の講師だった齊藤 八雄氏が設計し、その後、中日ドラゴンズのキャンプで試用して改良を重ねられ、熊谷組の名古屋工場で製造されたものです。当館には1959年の開館当時にドラゴンズから寄贈されています。ボールハウジングと呼ばれる爪状の部分にボールを置き後方のハンドルでスプリングを引っ張り、その後スプリングとボールハウジングをつないでいる部分を離して、ボールが飛び出すようになっています。直球だけでなく、カーブやシュートなどの変化球も可能で、さらに上向きに打ち出せば、フライの練習もできるように作られています。この投球機が作られた頃は、バッティング投手はいなかったため、打撃練習のためには投手が投げなければならなかった時代で、この機械は投手10人分ぐらいの活躍をしたといわれています。総重量135kg、製造番号1029、製造年月日33.1.15、特許番号30 24758、と書かれたプレートが付いています。

移転以前の博物館では常設で展示しており、子供たちに人気の展示品でした。大きな機械なので移転後はなかなか展示する機会がありませんでしたが、昨年の改修によりイベントホールに展示するスペースが出来ました。動く部分やとがった部品があるので安全に展示できるように工夫して、夏休みまでにはみなさんにご覧いただけるようにしたいと考えています。



学芸員 新 美和子



殿堂入りの人々を語る (27)

夫・梶本 隆夫

梶本 享子 (梶本 隆夫氏 夫人)



2007年野球殿堂入り
梶本 隆夫氏レリーフ

今年もプロ野球が始まりました。1954年の開幕戦に、高卒の新人梶本が先発し、救援を受けましたが初勝利をあげました。新人としてすばらしいスタートをきったお蔭で、ピッチャーとして20年投げる事ができ、監督、コーチとして42年間ユニフォームを着る事が出来ました。このパ・リーグ初の新人開幕勝利、9連続奪三振等の他に、66年に15連敗という不名誉な記録もありました。最初の負けは、迎えに行っていた大阪球場のナイターで、勝っていたので外へ出て待っていたのに、なかなか出てこなくて、

やっと出てきたら「負けた」というのが始まりでした。それからは、そんなに打ち込まれた試合もなかったと思うのですが、終わったら負けていたという事が続きました。縁起をかついで、着ていくシャツやズボンを替えたり、球場へ行く道を変えたりしても、勝ちにつながりませんでした。普通、別に調子が悪くなくても、そんな負け運の投手など使いたくない、と思うものですが、当時の西本監督は「15連敗するまで使い続けて下さった。」と、後に「15連敗は不名誉な記録だけれど、そんな自分を使い続けて下さった監督に、感謝してもしきれない、自分にとっては本当に名誉な事だ。」と西本監督を尊敬し、全幅の信頼をおいていました。晩年ゴルフをご一緒する事があると迎えに行き、何かおいしい物があると監督に…と、ご迷惑も考えず届けたり…と大好きでした。主人が亡くなった日、大きな盛花をかかえて、枕元に座って冥目して下さいました。きっと主人は、うれしい反面、自分がしなければならない事をさせてしまって、逆縁の不孝を身を縮めて申し訳なく思った事でしょう。

普段の主人は、興味を持つ事も多く、日々の生活を楽しむ事が上手な人でした。趣味もゴルフ、魚釣り、音楽、写真、競馬、競輪、ボート等々。音楽は身近にあってクラシック、ジャズ、歌謡曲、日本の唱歌など、なんでも好きで、自分でアレンジしたオーディオセットでいつも聴いて楽しんでいました。若いときに買ったイタリア製のアコーディオンを、楽譜は読めないのにメロディを知っていれば上手に弾きました。ご機嫌になれば「男の背中」「北の旅人」「時代おくれ」など、歌いました。観客は多い程いいナと言いながら…。機器にも凝る方で「オーディオ」という雑誌であれこれ研究して、アンプは…、スピーカーは…と、夢は、いい機器に囲まれたオーディオルームで音楽を楽しむ事でした。写真もお正月故郷の多治見に帰った時など、兄弟3人でパネルに仕上げた写真を持ちよって家族に投票させたりして、にぎやかに盛り上がったものでした。また、カメラにも凝って、上からのぞくローライフレックスや、昔ドイツのスパイが使っていたという手の中に入る位のミノックスというカメラや、海外旅行といえば大きな8ミリカメラを買って持っていき、遊覧のヘリコプターに乗ればパイロットにカメラマンと間違えられて、絶壁ギリギリの所を滝壺まで垂直に降下するサービスをしてくれて、冷汗ビッシヨリになっていたこともありました。野球でも趣味でも日常生活でも研究熱心で、人をビックリさせたり喜ばせる事が好きでした。もう1年投げられたら、こんなボールを投げようと考えている…とか。(今でこそクローザーという役割が確立していますが)最後の1イニングとかだったら投げられるから、そんな契約しようか?とか言ったりしておりました。主人は、どんな時でも流れに逆らわず、一生懸命にベストをつくす…。それも自分流に楽しみながらという生き方をしてきたように思います。

子供の頃から好きな野球を職業として、野球の殿堂にも入れて頂き、色々な趣味を通して友達と楽しみ、家族とも食べて飲んで楽しく過ごし、いろんないい思い出を残してくれました。大勢の人々に愛された主人は本当に幸せなよい人生だったのではないかと、しみじみ思い返しています。



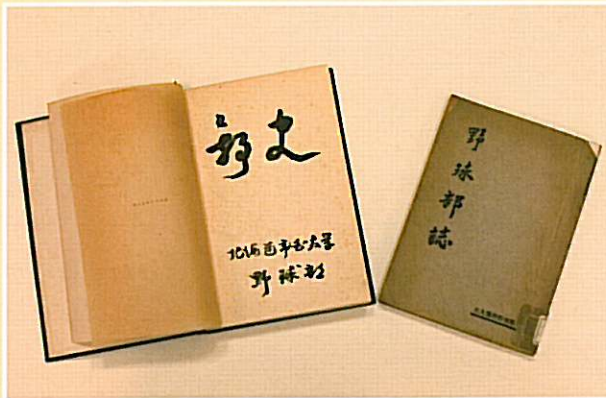
こんにちは図書室です



北大野球部史に見る北海道明治期の野球

今年も野球シーズンが始まりました。全国の大学野球リーグ戦も各地で熱戦が繰り広げられています。そこで、今回は当館の図書室が所蔵する各大学野球部史の中から、北海道大学の野球部史をご紹介します。

北海道を開拓するために、明治5(1872)年に東京・増上寺に設けられたのが北海道大学の前身である開拓使仮学校です。明治8(1875)年に札幌(札幌学校と改称)に移転、翌年には札幌農学校として開校します。「北海道大学野球部100年史」(2001年 発行:北海道大学図書刊行会)には「開校時にクラーク博士と共に来札した植物学・化学教師のペンハロー(D. P. Penhallow)がベースボール通でルールに詳しくコーチ役を務めた」と記載されています。北海道野球の歴史は札幌農学校創立と共に始まりました。



明治20(1887)年に、のちに野球部の初代部長になる松村 松年が東京・明治学院から札幌農学校の予科に入学します。当時の野球について「部史」(1938年 発行:北海道帝国大学野球部)によると、素足か足袋の格好で、グローブ・ミット等は無く、投手は下からすくい投げ、捕手は打者の二、三間後ろにいてこれをワンバウンドで捕球するというものでした。アンパイアーは投手の後ろにいて、ストライクと言わずに『いい球』『惜しい球』とコールをしていました。松村は東京の新しい規則や野球技術を北海道に持ち込みました。「野球部誌」(1949年 発行:北大予科野球部)の中で、松村は当時の野球用具について「自ら電線を曲げて、マスクを作り、グローブに豚脂を入れてミットを造った」と語っています。また「松村松年自伝」(1960年 発行:造形美術協会)の中では「プロテクターも剣道の胴を使ったが、急所を守るためにお椀をぶらさげた」と当時を振り返っています。

明治34(1901)年、札幌農学校に正式に野球部が誕生しました。前出の「部史」によると「日本には規則書などなかったのでアメリカからスパルディングといふ年報をとって研究した」とあります。また「部史」には明治35(1902)年の選手達の集合写真があり、蝶ネクタイをしてバットやグローブを持っている姿で写っています。

今回紹介しました4冊以外にも、「小樽商科大学野球部史」や函館オーシャン関係の書籍など北海道の野球に関するものも所蔵しております。図書室でご覧いただけますので、ぜひご利用下さい。



明治35(1902)年の選手たち「部史」より

司書 茅根 拓



博物館からのお知らせ

👇👇👇 販売しています! 👆👆👆

東尾 修氏野球殿堂入り記念直筆サインボール

25,000円 (税込)



平成22年に野球殿堂入りされた東尾修氏の直筆サインボールを販売します。
ご購入ご希望の方は、当館ホームページをご覧ください。
(<http://www.baseball-museum.or.jp>)
*数に限りがありますので、お求めはお早めに。

商品説明

[ボール] NPB公式ボール 直筆サイン入り
[素材] ケース: ガラス / 台座: 木製
[色] ケース: 透明 / 台座: ブラウン
[サイズ] ボールケース: 縦14.5cm×横13cm×奥行(台座含)13cm
[付属品] 野球体育博物館証明書、野球殿堂2009(書籍)、野球体育博物館ご入館券(6枚)

グリーンリストバンド

500円 (税込)



ファンの皆様にも温暖化防止に参加・協力していただけるよう、プロ野球選手が装着し、温暖化防止をアピールする「グリーンリストバンド」の販売を開始しました。

売上金の一部はCO₂削減のための植樹活動「プロ野球の森」に役立させていただきます。

※画像は販売用のデザインです。選手着用とのデザインとは異なります。

オフィシャル・ベースボール・ガイド 2010

2,900円 (税込)



(社)日本野球機構編
1963年から毎年発行されているプロ野球公式記録集です。両リーグの全選手投・打撃成績・全投手成績、日本シリーズ・オールスターゲームの記録集、イースタン・ウエスタンリーグの成績、セ・パ両リーグの記録集などプロ野球の1年の出来事がわかる一冊です。

プロ野球公認球

1個 1,600円 (税込)



コミッショナー事務局 (NPB) では、日本野球独特の「反発テスト」をしています。超高速マシンから打ち出したボールを鉄板にぶつけ、ぶつかる前の速度と跳ね返りの速度を計り、その比 (反発係数) を出して、一定範囲に納まるものを「合格」としています。マシンと連動のパソコンで計測されますが、専門的にいいますと「秒速75メートル (時速270キロ) のところで反発係数0.41~0.44の範囲に入ると合格」となります。この基準を上回ると「飛ぶボール」で不合格、下回ると「飛ばないボール」でやはり不合格です。合格したボールに「試合に使うてよろしい」との合格印「Official Game Ball」が押されます。このコミッショナー印の押された試合球は、一般には販売していません。それほど「貴重」なのです。
※郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金 (公認球代+梱包送料) を現金書留で当博物館までご送付下さい。

梱包送料: 1個 250円 2~3個 400円 4~6個 600円
送付先: 〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

財団法人野球体育博物館 公認球係

※7個以上お求めの方は、当博物館 (TEL: 03-3811-3600) までお問合せ下さい

クオ・カード

1,000円 (税込)



野球殿堂入りの長嶋 茂雄氏と王貞治氏の「クオ・カード」を販売しています。(額面は500円です)
※なお、日米野球 (デザインはペーパーのポスター) のテレホンカードも販売しています。(1,000円・税込)

かつとばし

大 (男性用)・中 (女性用) 1,890円 (税込) 小 (子供用) 1,575円 (税込)



折れたバットのリサイクル商品「かつとばし」を販売しています。
この箸は野球殿堂 (Hall of Fame) のロゴが入った博物館オリジナル商品です。また12球団ロゴマーク、ペットマーク入りの箸も販売しています。

(オリジナル箸の仕様)

長さ: ※大 23.5cm 中 21.5cm 小 18.0cm

材質: バット材アオダモ 塗装: 箸先部 うるし塗装

※12球団ロゴマーク、ペットマークは大サイズのみ

【理事・評議員】

〔就任〕

- ・理事 市野 紀生氏 (日本野球連盟会長)
- 八田 英二氏 (日本学生野球協会会長)
- ・評議員 笹川 博氏 (ベイスターズ取締役連盟担当兼業務部長)

〔退任〕

- ・(常務) 理事兼評議員 松前 達郎氏 松田 昌士氏
- ・評議員 丸山 博氏 八田 英二氏
- 大山 則夫氏 依田 龍也氏

● 博物館のご案内

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日~9月30日 AM10時~PM6時

10月1日~2月末日 AM10時~PM5時

(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大 人 500円 (300円) } () は
小・中学生 200円 (150円) } 20名以上の団体
65歳以上 300円

休館日 月曜日 (祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
年末年始 (12月29日~1月1日)

《5月・6月・7月の休館日》

5月 10日・17日・31日

6月 14日・21日・28日

7月 5日・12日

*7月13日(火)~9月12日(日)まで無休です。

●編集後記 新しいシーズンが始まりました。今年もプロ・アマいろいろな大会が開催されます。特に注目なのは、日本初開催の世界大学野球選手権大会 (7月30日~8月7日) です。大学の世界No.1が、ここ日本で決まるというのは、わくわくします。次号は7月23日に行なわれる殿堂入り表彰式の速報になりますので、発行が8月上旬になります。

Newsletter Vol.20 / No.1

2010年4月25日発行

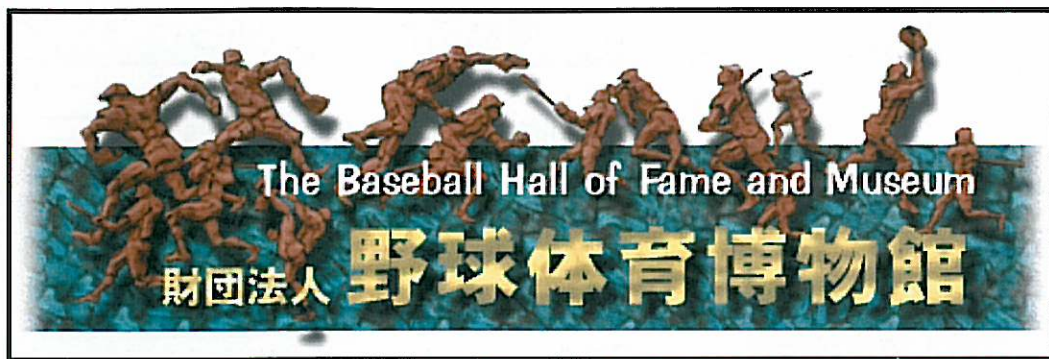
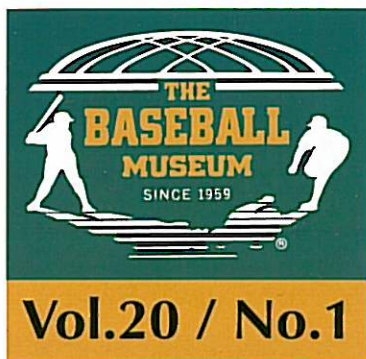
編集・発行 財団法人 野球体育博物館

〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 3369

<http://www.baseball-museum.or.jp/>

定価 100円



リレー随筆(40)

サムライジャパン野球文学賞

競技者表彰委員会幹事 小林 政富 (共同通信社)

「サムライジャパン野球文学賞」なる威勢のいいタイトルの賞ができ、3月10日に第1回表彰式があった。野球日本代表が昨年、ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)を連覇したことを記念して設立されたもので、2009年の1年間に発行された野球に関する小説、ノンフィクション、コミックなどの出版物が選考の対象となった。最終的に9作品が候補となり、大賞には小説「ノーバディノウズ」(本城 雅人著、文藝春秋)が選ばれた。岩村 明憲(ピッツバーグ・パイレーツ)小宮山 悟(野球評論家)網島 理友(エッセイスト)の3氏が選考委員会委員を務めた。

選考に残った作品は大賞のほか、「あの日、野球の神様は“背番号3”を選んだ〜天覧試合昭和34年6月25日〜」(松下 茂典著、ベースボール・マガジン社)＝ノンフィクション、「あるキング」(伊坂 幸太郎著、徳間書店)＝小説、「最弱ナイン」(柳川 悠二著、角川書店)＝ノンフィクション、「スコアブック」(伊集院 静著、講談社)＝児童小説、「ナイン」(川上 健一著、PHP研究所)＝小説、「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」(岩崎 夏海著、ダイヤモンド社)＝小説、「ラストイニング」(神尾 龍原作、加藤 潔監修、中原 裕作画、小学館)＝コミック、「ラストダンス」(堂場 瞬一著、実業之日本社)＝小説の8点。この機会に数冊読んでみたが、さすがに力作ぞろいだった。

大賞の「ノーバディノウズ」は、米大リーグで本塁打を量産する謎の東洋系スラッガーを巡って繰り広げられるサスペンスで、一気に読ませる。ストーリーの展開もさることながら、感心したのは野球にかかわる細部の描写が的確だったことだ。筆者の本名は元サンケイスポーツ記者の楠山 正人氏で、自らの取材経験に加えて、野村 克也氏や日米で活躍した吉井 理人氏らの話を執筆の参考にしたという。これまで、あやふやな野球知識で書かれた国内の小説を読んで「実際とはかなり違うなあ」と首をひねることがあった。それに比べてこの作品は「よく書けているな」という印象があり、選考委員の小宮山 悟氏もそのあたりを高く評価していた。

日本ではノンフィクションに優れた野球ものが多いが、小説好きの立場からすれば、良質な野球小説もたくさん読みたい。だが、なぜか記憶に残る小説はそう多くない。試しにパソコンで、フリー百科事典ウィキペディアの「野球を扱った作品一覧」という項目を開いてみた。ここには漫画、小説、映画、ドラマなどの作品がジャンル別に列記されている。作品数は漫画が圧倒的に多く360。「巨人の星」や「ドカベン」など代表的なものはいくつもある。これに対し、意外にも小説(国内)は59と少なく、映画(国内)の56とほとんど変わらない数だ。

今回の野球文学賞は設立したことにまず大きな意義があったが、次回からは小説、ノンフィクション、コミックなどをジャンル別にして賞を設ける方がいいような気がする。懸賞金付き小説を公募するのも一考かもしれない。この2月に、英国の作家ディック・フランシスが亡くなった。元騎手だっただけに、競馬界の内幕を描いた現実味のあるミステリーに、ぐっと引き込まれたものだ。そんな小説が日本でも、野球をテーマにして次々と生まれてほしい。こうした賞が契機になればと願っている。